

コピー制作にみる模倣と革新
——ブリューゲル父子の《死の勝利》を中心に——

香月 比呂 (九州大学)

今まさに死の軍勢に蹂躪されんとする褐色の世界を描いたピーテル・ブリューゲル1世の《死の勝利》(ca. 1562)には、彼の二人の息子たち、長男ピーテル・ブリューゲル2世と次男ヤン・ブリューゲルらによって制作された複数のコピー作品が存在する。現存するコピーの内、最も早い1597年の年記のあるヤンのコピーは特に品質が高く、オリジナル作品の複雑な構図やモチーフがほぼ正確に再現されているが、それゆえに目を引くのは前景の祝宴のテーブルに集う人々の衣装にみられるオリジナル作品との顕著な相異である。特に最前部の若い女の青いドレスが、当世風の飾り襟のついた華やかな黄色いドレスへと描き変えられている点は注目に値する。

しかしこの相異について、先行研究では最前部の男女のモチーフが特定の個人の肖像である可能性が指摘されるにとどまり、なぜヤンが本コピーにあえて部分的な改変を施したのかという点については十分に議論が尽くされていない。そこで本発表では、ヤンの《死の勝利》におけるオリジナル作品との相異点、とりわけ当世風の黄色いドレスを着た女に着目し、本モチーフ改変を、コピー制作を通して父ピーテル1世の作品に学び、その創意を自らの作品へと展開させた、ヤンの模倣と革新の試みの一端として捉え直し、積極的に再評価する。

ヤン・ブリューゲルの《死の勝利》に描かれた黄色いドレスの女について考察するにあたり、本コピー制作と前後する時期の彼の作品に、類似するモチーフが頻繁に描かれていることに着目したい。ヤンは《死の勝利》のコピー制作以前から、地下世界に下るキリストやアエネーイスを主題とした複数の作品に、他の登場人物とは明らかに異質な当世風のドレスの女を繰り返し描き込んでいた。そして興味深いことに、コピー制作の後、聖書の物語を添景として挿入した彼の風景面に再び登場した黄色いドレスの女は、その洗練された佇まいでより一層際立ち、あたかも鑑賞者の視線を画中へと誘うかのような役割を担っているのである。

ヤンの《死の勝利》をこれら同時期の作品の中に位置づけるならば、本コピーの制作が、彼が当世風のドレスの女のモチーフを、画中の世界と現実の世界とをつなぐ仲介者として描く契機となったことが推測される。ヤンはコピーの制作を通して、オリジナル作品の最前景に描かれた当世風の人物像が、死と生者の闘争が展開する非現実的絵画空間と鑑賞者とを結び付けていることを看取したのではないだろうか。それゆえ、登場人物の衣装を自らの時代にふさわしくアップデートさせることで、オリジナル作品の制作当時にモチーフが有していた機能を蘇らせるとともに、それを自身の作品に発展的に応用したのである。つまり、ヤンのコピー作品における改変についての考察は、ピーテル1世の《死の勝利》を当時の人々がどのように鑑賞し、理解したのかという本質的問いに迫る手掛かりをも与えてくれるのである。